

フィードバック分析を実施し、次の行動につなげる

## 【2】自らの強みを知る（プロフェッショナルの条件、P・ドラッカー）

何かをすることに決めたならば、『何を期待するか』を直ちに書き留めておかなければならない。そして九カ月後、一年後に、その期待と実際の結果を照合しなければならない。

その結果、以下のことが明らかになる。

### ①強みに集中する

第一は、うまくいったことに注目し、明らかになった「強みに集中する」ことである。「成果を生み出すものに強みを集中すること」である。

### ②強みをさらに伸ばす

第二は、「その強みをさらに伸ばす」ことである。フィードバック分析は、伸ばすべき技能や新たに身につけるべき知識を明らかにする。更新すべき技能や知識を教える。逆に自らの技能や知識の欠陥を教える。無能ではないという程度の技能や知識ならば、よほどのものでないかぎり、誰でも手に入れることが出来る。

（数学者になるためには才能が必要である。だが、三角法は誰でも学べる。外国語も、誰でも学べる。歴史、経済学、化学についても、同じことがいえる。）

### ③知的な傲慢を正す

第三は、とくに重要なこととして、無知の元凶ともいうべき「知的な傲慢を正す」ことである。多くの人たち、とくに一芸に秀でた人たちが、他の分野を馬鹿にする。他の知識などなくとも十分だと思っている。ところが、フィードバック分析は、仕事の失敗が、しばしば知っているべきことを知らなかったためであったり、専門以外の知識を軽視していたためであったことを明らかにする。

（一流の技術者というものは、人間について、むしろ何も知らないことを自慢したがる場所がある。彼らの目から見れば、人間はあまりにも不合理な存在である。同じように、会計士も、人間を知る必要はないと考えがちである。逆に、人事の人間は、会計や定量的な手法を知らないことを鼻にかける。海外拠点の責任者となったものは、経営に優れてさえいれば、活動の舞台となった国の歴史、伝統、文化、芸術を学ぶ必要はないと考える。まさにそのために、せつかくの経営能力をもってしても、いかなる成果もあげられない。）

したがって、知的な傲慢を改め、自らの強みを十分に発揮するうえで必要な技能と知識を身につけていかなければならない。

### ④自らの悪癖を改める

第四は、「自らの悪癖を改める」ことである。自らが行っていること、あるいは行ってい

フィードバック分析を実施し、次の行動につなげる

【2】自らの強みを知る（プロフェッショナルの条件、P・ドラッカー）

ないことのうち、仕事ぶりを改善し成果を上げるうえで邪魔になっていることを改めなければならない。そのいずれもが、フィードバック分析で明らかになっているはずだからである。

（たとえば、せつかくの企画が失敗したのは、十分にフォローしなかったためであることが明らかになる。多く見受けられることは、優れた企画担当者というものが、企画が出来上がった段階で働くことを止めてしまっている。本当の仕事はそれからである。実行してくれる人たちを探し、説明し、詳細を教え、必要に応じて企画を変更し、やがていつあきらめるべきかさえ決めなければならない。）

⑤人への対し方に配慮する

第五は、「人への対し方の悪さ」によって、みすみす成果をあげられなくすることをやめることである。頭の良い人たち、とくに若い人たちは、人への対し方が潤滑油であることを知らないことが多い。

（物体が接して動けば摩擦を生じることは、自然の法則である。二人の人間が接して動いても、摩擦が生じる。その時、人への対し方が摩擦を減らす潤滑油の役割を果たす。「お願いします」や「ありがとう」の言葉を口にする、名前や誕生日を覚えていること、家族について尋ねることなど簡単なことである。もし素晴らしい仕事が、人の協力を必要とした段階で常に失敗するようであれば、一つの原因として、人への対し方、すなわち礼儀に欠けるところがあるのかもしれない。）

⑥「行ってはならないこと」は行わない

第六は、「行ってはならないことは行わない」ことである。フィードバック分析によれば、行ってはならないことが明らかになる。必要な能力が欠落しているためである。人には、苦手なものはいくつもある。超一流の技能や知識を持つ者は少ない。しかも人には、並みの才能さえもちえない分野がたくさんある。そのような分野では仕事を引き受けてはならない。

⑦「並みの分野での能力向上」に時間を使わない

第七は、「並みの分野での能力の向上に無駄な時間を使うことをやめる」ことである。強みに集中すべきである。無能を並みの水準にするためには、一流を超一流にするよりも、はるかに多くのエネルギーを必要とする。

しかるに、あまりに多くの人たち、組織、そして学校の先生方が、無能を並にすることに懸命になりすぎている。資源にしても時間にしても、「強み」をもとに卓越性の追及に使わなければならない。